

日本のスキー場における外国人との共生  
～野沢温泉村と白馬村の比較研究～

法学部政治学科 3 年 K 組

塩原良和研究会 10 期

学籍番号 31652483

大村明日香

【目次】

1. はじめに
  - 1-1 問題意識と研究目的
  - 1-2 各章の概要説明
2. 問題の分析
  - 2-1. 観光とはなにか
  - 2-2. 日本における外国人観光客増加の背景
3. 野沢温泉村について
  - 3-1. 野沢温泉村の概要
  - 3-2. 野沢温泉
  - 3-3. 野沢温泉スキー場
  - 3-4. 外国人観光客誘致活動
4. 白馬村について
  - 4-1. 白馬村の概要
  - 4-2. 変化する白馬村
  - 4-3. 外国人観光客誘致活動
5. 野沢温泉村と白馬村における外国人観光客のマナーの現状～インタビュー調査を通して～
  - 5-1. 調査の内容
  - 5-2. インタビューの内容
6. 野沢温泉村における外国人観光客のイメージ
  - 6-1. インタビュー調査を通して考える、野沢温泉村における外国人観光客
  - 6-2. ポジティブな印象を持つ理由
  - 6-3. 「中国人」にネガティブな印象を持つ理由

7. 白馬村における外国人観光客のイメージ
  - 7-1. 白馬村における外国人観光客のイメージの概要
  - 7-2. ポジティブな印象を持つ理由
  - 7-3. ネガティブな印象を持つ理由
  
8. 野沢温泉村における増え続ける外国人経営者との関係
  - 8-1. 外国人経営者のかたち
  - 8-2. 外国人経営者が増えることへの懸念
  - 8-3. 外国人経営者が野沢で果たしている役割
  - 8-4. 共生に向けた取り組み
  
9. 白馬村における増え続ける外国人経営者との関係
  - 9-1. 外国人経営者のかたち
  - 9-2. 外国人経営者が増えることへの懸念
  - 9-3. 外国人経営者が野沢で果たしている役割
  - 9-4. 共生に向けた取り組み
  
10. 野沢温泉村と白馬村の違いを生んだ背景
  
11. 今後の展望 ～増え続ける外国人といかに共生していくか～
  - 11-1. 野沢温泉村への提言
  - 11-2. 白馬村への提言
  
12. おわりに

1. はじめに

日本を訪れる訪日外国人の数は、24,000,000人（観光庁・2016・年別訪日外客数、出国日本人数の推移）を超え、在留外国人数は過去最高の2,731,093人（法務省・2019・在留外国人数）を記録した。増え続ける外国人とどのように共生していくかは現代を生きる私たちにとって無視できない課題の一つとなっている。2020年の東京オリンピック開催が決定し、さらなる外国人の増加が見込まれる今日、外国人のマナーに関する問題は耳にする機会が多い。とりわけ目立っているのは、中国人観光客のマナーの悪さを批判する報道や記事、テレビ番組である。「爆買い」や「ポイ捨て」、「ところかまわず大声で騒ぐ」存在として、取り上げられる中国人の記事やニュースを一度は耳にしたことのある人も多いのではないだろうか。それは時には、ある種のレイシズム<sup>1</sup>に落とし込まれて報道され、それ自体を「国民性」として私たちに認識させる。しかし、必ずしもそれは事実当てはまるわけではない。

このような報道がなされている傍らで、私には一つの疑問が浮かんだ。私が何年も冬を過ごしてきた幾つかのスキー場は外国人の移住者も多く、外国人観光客が大部分を占めているにも関わらず、そのような問題はあまり身近に感じたことがなかった。私が過ごしている村々に外国人と上手く共生するヒントが隠れているのではないかと考え、その実態をインタビュー形式で調査することにした。本稿では、私が冬を過ごしてきた野沢温泉村と白馬村における外国人との共生の仕方を紹介しつつ、両村がこの先いかに外国人と共生していくかを考えていきたい。

本稿執筆にあたって、冬を過ごしてきたスキー場の中でも、長野県の野沢温泉村と白馬村を研究対象とすることにした。1990年代のバブル期にスキー業界は大きく発展したが、バブル崩壊後、衰退を余儀なくされている状況があった。そんな中、日本のスキー界を支えたのはまさに外国人の存在である。最も知られているのは北海道のニセコであるが、長野県の白馬、新潟県の妙高・赤倉や山形県の蔵王、そして野沢温泉もその一つである。数あるスキー場の中で野沢温泉村と白馬村を選んだのには理由がある。私は高校時代からスキー部に所属しており、これまで6回の冬を野沢温泉スキー場で過ごしてきた。そして、白馬においても5度の合宿を経験し、白馬で開催される大会に出場していく中で、自分にとってなじみのある村となった。大学生になってからは、野沢温泉村の旅館に居候しながら働くようになった。居候という立場は、旅館を経営する家族と共に過ごす時間が長く、野沢温泉村のコミュニティとかかわりながら、外国人を迎える側に近い視点で生活することができる。居候を通して得た視点、白馬村で客として何度も滞在する中で得た視点を生かし、インタビュー調査を軸に論文を執筆していきたい。

本稿の構成は以下の通りである。まず2章で「観光」の定義について考える。そして、3・4章で今回取り上げた野沢温泉村と白馬村の概要と、両地域における外国人観光客とのつながりについて説明する。5章では、実際に野沢温泉村と白馬村で観光業を営んでいる

---

<sup>1</sup> ここにおけるレイシズムとは、人間集団の社会的違いを、生物学を基調とする本質主義的な違いとして、偏見や差別の根拠とすることとする。

人々にインタビューを行う。6・7章では、インタビューの結果を踏まえ、各村の外国人観光客との共生の実態とその原因を分析する。8・9章では、インタビュー調査の結果を踏まえ、各村の外国人移住者・経営者との関係を記し、どうしてそのような結果が得られたのかを分析する。10章では、野沢温泉村と白馬村を比較した結果、そのような違いが生まれた原因を分析する。最後に11章では、これまで行った調査の結果を踏まえ、今後どのように共存していくべきかについて考えていく。

本稿が、増え続ける外国人と共に生きるためのヒントとなれば幸いである。

## 2. 問題の背景

### 2-1. 観光とはなにか

外国人観光客に関連するテーマを取り扱うにあたって、まず「観光」の定義を明らかにしたい。この章では観光とは何か、観光の起源はどのようなもので、観光業がいかに発展してきたのかを説明する。

まず観光の定義について、日本の公的機関が公表しているものを述べる。1979年に総理府が「自然景観や名所・旧跡を<鑑賞・見物>したり、神社・仏閣に<参詣>すること」(大関,2007,P177)とした。そして、その後、1995年には観光政策審議会が、「今後の観光政策の基本的な方向について」の中で、「余暇時間の中で、日常生活圏を離れて行うさまざまな活動であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とするもの」として観光を正式に定義している。

そもそも観光という語は、中国の王朝であった周の古典『易経』に「国の光を観るは以って王に賓たるによろし」(大関,2007,P177)と記載されていることが語源とされている。様々な国を視察し、その国の良い点である光を学び、自国に持ち帰って吸収することが大切という意味であり、その中には「移動」の概念が含まれている。また、観光の英訳である Tourism は、ラテン語で観光地を巡って戻ってくるという意味を指す Tournus が語源とされており、いずれも異文化に触れてまわる意味を含んでいるといえる。

### 2-2. 日本における外国人観光客増加の背景

これまでどのような背景があって観光が発達してきたか、その背景を俯瞰してきた。この節では日本において外国人観光客が増加した原因を考えていく。

日本を訪れる外国人の数は2016年に24,039,700人を記録した(日本政府観光局,2016)。小泉政権において「観光立国」が宣言され、「ビジット・ジャパン事業」が始まった2003年の時点では5,211,725人であった(日本政府観光局,2003)。リーマンショックの起こった2009年や東日本大震災の起こった2011年のように減少した年もあったものの、日本を訪れる外国人の数は着実に増え続けている。

まず政府の行った施策としては、上記にも述べたように2003年以降「観光立国」を目

標に掲げ、「ビジット・ジャパン事業」がスタートした。国土交通省主導で日本に外国人観光客を誘致するプロモーション活動が進められた。2008年には「観光庁」が発足し、Japan Expo in Parisにてジャパンカルチャーを紹介したり(2010年)、研究会や会議を多数開催してきた。また、入国ビザの緩和も外国人観光客増加に拍車をかけた出来事の一つである。2013年には、マレーシアとタイにおいてビザが免除され、2014年にはインドネシア、フィリピン、ベトナムの三国に向けたビザの大幅緩和が行われた。(外務省、2013,2014)日本を訪れる外国人観光客の内訳をみると、中国が最も多く、韓国、台湾とアジア諸国が続く(日本政府観光局、2018)。これまでは中国人観光客を対象にしてきたビザの緩和を、中国だけでなくほかのアジアの国々にも適用し始めたことで、アジアの人々が日本に入国するハードルが下がったといえる。

他の要因としては、2012年12月からの円安の影響や、インターネットやSNSの普及による日本に対する関心の高まりも挙げられる。円安により、円安元高になり中国人観光客のショッピングのための訪日が増加した。そして、インターネットやSNSの普及は、海外からの日本の文化へのアクセスを容易にし、外国における訪日需要を高めていると考えられる。このような政府による施策や、要因によって日本における外国人観光客は大幅に増加したのである。

### 3. 野沢温泉村について

#### 3-1.野沢温泉村の概要

野沢温泉村は、長野県北東部の下高井郡に位置する人口3400人余りの村である<sup>2</sup>。主業は観光であり、野沢温泉スキー場や野沢温泉で知られている。野沢温泉村の村役場による行政のほかに「野沢組」という地縁団体が存在し、村民自身の手によって行政が補佐されている。江戸時代後期より続く村人の自治組織である「野沢組」は、村人の共有財産である自然(山林・水源)や温泉を守り、村人の生活を支えてきた<sup>3</sup>。例えば、村民が大切に思っている資源の一つに野沢温泉村の水資源があげられる。実際野沢温泉村に行くと、村のあちこちから湧き水が湧き出ており、温泉街のすぐそばを美しい水路が流れている。こういった水路も行政によるものではなく、先人たちが手作業で開発した賜物であると言われている<sup>4</sup>。私自身、野沢温泉村には高校生の頃から7年間通い続けており、村人と行政の近さは肌で実感してきた。老若男女問わず、野沢温泉村の名物でもある13件の共同浴場(外湯)を大切に思っており、特に各々が所属する地域の外湯をある種の責任感をもって

---

<sup>2</sup> 2018.9.13 に実施した野沢温泉観光協会での聞き取りに基づく

<sup>3</sup> <https://nozawakai.or.jp/> 地縁団体野沢組のホームページ参照

<sup>4</sup> 2018.9.13 に実施した野沢温泉村における村民へのインタビューに基づく

共同管理している。地元の「湯仲間」という組織で掃除を行い、管理をしている。私がこれまでお世話になった宿の方や、居候先としてお世話になったご家族も定期的に「当番だ」と言って、最も近い外湯の掃除に出向いていた。月に1度、地域の湯仲間が集まって、お湯をすべて抜く大掃除も実施していた。現在、夏はスポーツのできる合宿地として、冬はスキー場や温泉地として賑わいを見せている野沢温泉村であるが、2000年代にかけて起こったスキー離れの影響を受け、一時は訪れる観光客の数が落ち込んだ。しかし2010年を過ぎたころから、オーストラリア人を中心に外国人観光客が増えはじめた<sup>5</sup>。現在に至っては、外国人が野沢温泉内で民宿を継いだり、バーを経営したり、パン屋さんを開いている様子が見受けられる。その数は、50~60軒あるとされ、村全体の1~2割を占めている<sup>6</sup>。

### 3-2.野沢温泉

野沢温泉とは、野沢温泉村にある温泉であり、奈良時代に行基によって発見されたとされている。泉質は硫黄泉である<sup>7</sup>。手負いの熊が怪我を治したことで知られる熊の手洗い湯は比較的低温だが、ほかの源泉はかなりの高温である。野沢温泉の特徴として、村の中に13軒の共同浴場（外湯）があることがあげられる。それらを巡ってまわる「外湯巡り」も観光客に人気である。冬場は、スキーの疲れを温泉で癒す観光客の姿が目立つ。野沢温泉の外湯にはお湯の出るシャワーはなく、村人はおいてあるケロリンの黄色い洗面器で温泉のお湯を汲んで、頭や体を洗う。熱い場合は水を洗面器の中のお湯に足して洗う。地元の人々は口をそろえて、長く入りすぎたはいけないと言う。温泉が高温なため、はじめに一瞬肩まで浸かって、すぐにお湯から出る。すると、二度目は体が慣れて入りやすくなるので、少し浸る。そして、長く入りすぎたのぼせないように、少し浸っては出ることを繰り返すそうだ。野沢温泉は地元の人々が「湯仲間」として管理しており<sup>8</sup>、地元の人々の温泉を守っていく意思は強い。髪が温泉に浸かっている人や、濡れたままのこの上へ上がろうとする人がいれば、それらを注意する地元の人々の様子は頻りに目にする。

野沢温泉には共同浴場のほかに麻釜（おがま）という、100度近いお湯が湧出している場所がある。居候していると、おかみさんたちが温泉卵を作ったり、野菜をゆでたりするためにたびたび麻釜に向かう様子が見られた。麻釜は地元の人には使われるが、観光客には事故防止のために立ち入りが禁止されている<sup>9</sup>。

---

<sup>5</sup> 2018.9.13 に実施した野沢温泉村観光協会職員へのインタビュー調査に基づく

<sup>6</sup> 2018.9.13 に実施した野沢温泉村観光協会職員へのインタビュー調査に基づく

<sup>7</sup> [www.nozawakanko.jp/spa/sotoyu.php](http://www.nozawakanko.jp/spa/sotoyu.php)

野沢温泉観光協会 ホームページ参照

<sup>8</sup> 2018.9.14 に実施した野沢温泉村における村民へのインタビューに基づく

<sup>9</sup> 2018.9.13 に実施した野沢温泉村における村民へのインタビューに基づく

### 3-3.野沢温泉スキー場

1923年に現在の野沢温泉村に誕生したスキー場である。30を超える滑降のコースと2つのクロスカントリースキーのコースも備えており、FIS公認レースや多くの全国大会も開催してきた<sup>10</sup>。1998年の長野オリンピックのバイアスロンの会場にもなったことで知られる。民間によるインバウンド・ツーリズムの目的地としてのスキー場評価<sup>11</sup>においても、ニセコと同率一位で5ポイントを獲得しており、外国人スキーヤーにも人気のスキー場となっている。

### 3-4.外国人観光客誘致活動

2013~2014シーズンから野沢温泉村の観光協会は本格的な調査を開始し、野沢温泉村を訪れる外国人観光客は毎年増加し続けている<sup>12</sup>。野沢温泉村における外国人誘致活動は、毎年10月にロンドンで行われるSki & Snowboard Showや2月に行われるイギリス・アメリカ旅行会社の招聘に出展する形での誘致活動<sup>13</sup>を除き、ほとんどがオーストラリア人をターゲットに絞ったものであり、その活動は野沢温泉観光協会が中心となって行われている。野沢温泉観光協会が行っている外国人観光客の誘致活動としては、野沢温泉観光協会が資料や荷物の準備を行い、宿の関係者が現地に飛んでプロモーション活動を行うことや、雑誌等への広告掲載などがある。野沢温泉観光協会としては、現時点でアジアへのプロモーションは考えていないが、実際その数は増えてきている。アジアからの外国人観光客に関しては、誘致活動を行わずとも、口コミやネット上にあげられた動画を見て、自然と集まっているようである。

野沢温泉がオーストラリア人の誘致を始めたのは、日本のスキー業界が低迷していた14.15年前、ニセコにオーストラリア人が来ているとの情報が舞い込んできたことがきっかけである。野沢温泉が誘致する外国人のターゲットをオーストラリア人に絞っているのにはニセコが成功していたこと以外にも理由がある。まずオーストラリアと日本の間には時差が少なく、呼び込みがしやすい。季節も違うので、日本のスキーヤーが夏にオーストラリアに滑りに行くように、シーズン外にスキーを楽しむことができる。加えて、オーストラリアでは長期休暇を取らなければならないという法律があり、旅行に行くために1年間働いて、バカンスで家族のために使う家族が多い。家族連れで、平均で4~5泊してく

---

<sup>10</sup> [www.nozawaski.com/winter/general/](http://www.nozawaski.com/winter/general/)

野沢温泉スキー場 ホームページ参照

<sup>11</sup> 資料: <http://www.powderhounds.com/Japan/Ski-Resorts-Ratings.aspx>

北米やニュージーランド、日本のスキー場へのスキー旅行の情報を取り扱っているサイトで公表されている評価。

<sup>12</sup> 資料:インタビュー調査において野沢温泉観光協会職員に見せていただいたデータに基づく。

<sup>13</sup> 2018.9.13に実施した野沢温泉村観光協会職員へのインタビューに基づく

れるオーストラリア人は野沢温泉の狙いとマッチしているのだ。

#### 4. 白馬村について

##### 4-1.白馬村の概要

白馬村は長野県北西部、北アルプスの麓に位置する人口 9400 人<sup>14</sup>余りの村である。北アルプス白馬連邦の麓にあり、白馬連邦の白馬岳（しろうまだけ）において万年雪が馬のように見える時期があることが村名の由来である。白馬村は有数の豪雪地帯であることから、スキーを中心とした観光業が盛んであり、ほかにも登山、ハイキングなど多数の観光資源を有する。中でも八方尾根スキー場は 1998 年の長野オリンピックの会場にもなった国内最大規模のスキー場である。白馬村では、アルペン・クロスカントリー・ジャンプ・ノルディック複合の 4 種目が開催された。

##### 4-2.変化する白馬村

1990 年代のスキー低迷期以降、白馬村もその影響を受けていたが、2005 年頃からオーストラリアや韓国からの観光客が増加した。白馬村は日米両国企業による高級ホテル開設や海外での知名度が上がる中で、経営難等から売りに出された物件を買収する外国人移住者の人口が急増し、現在では滞在型国際スキーリゾートとしての整備が進んでいる。長野県国際課調べでは、2018 年 12 月時点での外国人住民数は 971 人であり、前年同時期の 682 人と比較しても 1 年で 289 人の外国人住民が増加している。これは白馬村の人口 9780 人に対して 10.28%を占めており、急激な国際化が進んでいる<sup>15</sup>。加えて、これは住民登録をしている外国人の数であり、実際はそれ以上の数が現在の白馬村に移住していると考えられている。

このような急激な国際化・人口増加に伴い、平成 27 年 12 月に「美しい村と快的な生活環境を守る条例」が、住民側の声を受けて施行された。条例は「海外からの観光客の増加によって、ニーズの多様化やモラルの低下を招き、社会規範を無視した行動やルールを理解不足によるトラブル、いわゆる迷惑行為が増加する結果」<sup>16</sup>となっていることにより、午前 2 時以降の種類の提供や花火、路上スキー、歩きタバコ・飲酒等を禁止事項として告知したものである。白馬村にはこの条例以前にもごみ問題などに言及した生活環境を守る条例はあったが、今回の条例は外国人が急増している流れを汲み、外国人と日本人に向け

---

<sup>14</sup><https://www.pref.nagano.lg.jp/kokusai/sangyo/kokusai/tabunka/tabunka/documents/30si tyouson.pdf> 市町村別外国人住民数及び総人口に占める割合 長野県国際課 調べ

<sup>15</sup><https://www.pref.nagano.lg.jp/kokusai/sangyo/kokusai/tabunka/tabunka/documents/30si tyouson.pdf> 市町村別外国人住民数及び総人口に占める割合 長野県国際課 調べ

<sup>16</sup> [https://www1.g-reiki.net/vill.hakuba/reiki\\_honbun/e799RG00000467.html](https://www1.g-reiki.net/vill.hakuba/reiki_honbun/e799RG00000467.html)

て発信するためにニセコをお手本に作成したものである。しかし、この条例には罰則規定等はないため、白馬村の住民に認知はされつつも、改善されたとは言い難い現状もあるようだ。

#### 4-3.外国人観光客誘致活動

都市への人口の流出、村民人口の減少という課題を抱える白馬村は、外国人観光客誘致を推進するために、冬場に来訪し滞在する外国人観光客を対象にアンケート調査を実施してきた。内容は食や文化、野外活動など滞在中に体験する内容や問題点を問うたものである。こういった取り組みは10年以上前から始められてきたものであり、このようなアンケートの調査結果をもとに問題点を改善し、さらに外国人観光客が快適に過ごせる環境を築くことで、誘致を促進してきた。

また、村役場では観光戦略として、韓国やオセアニア、さらに近年では東南アジア系に売り込みを行っているようである。それは、外国人観光客や移住希望者に分けての売り込みではなく、まとめて白馬村として売り込みを行っている。一方、増え続ける外国人移住者の中には、独自のルートで母国の観光客を呼び込んでいる人も多数おり、彼らも自らのビジネスの中で、外国人観光客を誘致する結果となっている。

### 5. 野沢温泉村と白馬村における外国人の共生の現状～インタビュー調査を通して～

#### 5-1. 調査の概要

野沢温泉村と白馬村の人々が感じる外国人との共生の実態を知るために、インタビュー調査を行った。今回の調査の目的は、両地域における外国人観光客のマナーの現状を知ること。また、各地域がいかに外国人と共生しているのか。増え続ける外国人観光客、とりわけ近年増えている外国人経営者や外国人住民とこの先どのように関わっていこうとしているのかを探るところにある。その際、メディアでよく目にする外国人観光客のマナー批判と実際に二村を訪れている外国人の姿にギャップがないかという点にも注意して調査を行った。

野沢温泉村でのインタビュー調査は、2018年8月28日、9月13日、9月14日の3日間に渡り実施した。白馬村では、2019年9月4日、9月6日、9月7日の3日間に実施した。1度の調査に費やした時間は、30分から90分である。対象者は、野沢温泉村・白馬村で観光業に携わる8人の野沢温泉村の村民と4人の白馬村の村民である。居候先のおかみさんやこれまでお世話になった旅館の方々、スポーツ店のオーナーなどすでに知り合いで、インタビュー許可の取れている方に紹介してもらい、インタビューの対象者を広げる形で調査の対象者を決定した。村民として外湯の管理に関わっている人や、スキー場の近くでパトロールとして働く人、外国人観光客の生活の様子を近くで見ている民宿の経営者、さらには村に移住した外国人、外国人に不動産の仲介業する村民、野沢温泉観光協会

や白馬村村役場で働く人など、できる限り多様な立場の方にインタビューを実施し、より実態に近い調査となるよう努めた。本来なら、実際にスキー場を利用する外国人観光客にもインタビューを実施したいところだが、調査を行うのがシーズン外であったため、今回は実施することができなかった。

## 5-2.インタビュー内容

実際にインタビューの中で行った質問は以下の通りである。

(1)観光業に携わる日本人に対しては、①インタビューを受けてくれる人の普段している仕事の具体的な内容と、その仕事の中での外国人とのかかわり方、かかわる頻度。②外国人観光客・外国人移住者のイメージ。(出身国別のイメージも聞く)③外国人観光客・移住者のマナーの印象。具体的エピソード。(出身国別)④外国人観光客・移住者のマナーの問題点。それに対し、具体的に取り組んでいることがあるか、もしくは村として取り組んでいることはあるか。その効果はどうか。どういったアプローチが有効であると思うか。⑤逆に、外国人のマナーについて、いい意味で意外だったこと。メディアなどとのギャップを感じたことはあるか。あればその具体的内容。⑥村として、目指している外国人観光客・移住者との共存方法。描いているイメージ。それを実現するためには、現在何ができていて、何が不足していると思うか。

(2)地域に住む外国人経営者に対しては、①インタビューを受けてくれる人の普段している仕事の具体的な内容と、その中での外国人観光客とのかかわり方、かかわる頻度。②インタビューを受けてくれた人の出身国と、村に住みたいと思うまでの経緯。③村に移住してよかったと感じるのはどのような時か。逆に、村に移住しての苦労はあったか? どういった苦労が大きかったか。④文化、とりわけマナーにおいて違いを感じた経験はあるか? あれば、具体的にはどのような違いか。どのようにしてその文化(マナー)の違いを乗り越えたか。⑤日本で報道されている外国人観光客のマナーを取り上げたニュースは見たことがあるか? あれば、それに対して同意する点と、違うと思う点はどんなものか。⑥日本人や、村の人にもっとこうしてほしいと思うことはあるか。⑦村として、目指している外国人観光客・移住者との共存方法。描いているイメージ。それを実現するためには、現在何ができていて、何が不足していると思うか。

比較や分析がしやすいように、大きく6.7項目に分けたが、この枠にとらわれず、状況に応じて、興味深いことはより深く聞くことを心掛けた。

## 6. 野沢温泉村における外国人観光客のイメージ

この章は、インタビュー調査の結果として野沢温泉村住民が外国人に持っている印象を

記し、調査結果をもとにそのような印象を持つ要因を分析したものである。

#### 6-1. 野沢温泉村における外国人観光客のイメージの概要

現在メディアなどで取りざたされる外国人観光客は、とりわけマナーに関してネガティブな文脈で語られることが多い。しかし野沢温泉村でのインタビューでは、細かいネガティブなエピソードはあれ、ほとんどの村民が外国人観光客に対してポジティブな印象を持っていた。一方で、「オーストラリア人はフレンドリーで、マナーもよいが、中国人（とりわけ本土からの中国人）はマナーが気になることもある。」「野沢で最近中国系の人が何人か物件を買ったことを懸念している。それで野沢の雰囲気が変わってしまうのは嫌。」といったレイシズムや国民性に関わる意見も聞かれた。だが、ある程度の傾向は認められるかもしれないが、特定の民族だからマナーが悪いと断言することはできないであろう。そのように感じる要因やそういった傾向がどのようにして生まれているかについてインタビュー内容から推測しつつ、以下にインタビュー調査の分析を紹介する。

#### 6-2. ポジティブな印象を持つ理由

野沢温泉において、外国人観光客に対してポジティブな印象を抱いている人々は今回のインタビュー調査においてはほとんどであった。文化の違いによるトラブルが発生してもおかしくない中、そのように感じているのはなぜだろうか。以下に、インタビュー調査を通して明らかにされた理由を3つに分類して紹介する。

##### 1 外国人観光客の傾向

野沢を訪れている外国人観光客の出身国には偏りがある。ここ数年は中国やシンガポールをはじめとしたアジアからの外国人観光客も増えているが、野沢温泉スキー場を訪れている外国人観光客はオーストラリア人が大多数を占める。「オーストラリアの人だからマナーがいい」ということは決して言えないが、野沢温泉に移住して宿を営む、野沢のローカルルールに精通しているオーストラリア人のオーナーが、滞在する外国人観光客に対して声掛けをしてくれることで衝突が起きにくくなっているというのは言えるのではないだろうか。

またオーストラリア人は、バカンスを利用し、家族を連れて滞在することが多い。これは日本人にも言えることであるが、家族連れ（とりわけ子供のいる家庭）の観光客は夕食の時間も就寝時間も早い傾向にある。白馬のスキー場では、増加する迷惑行為やトラブルを受け2015年に飲酒や喫煙、ごみに関する禁止事項を定めた条例が制定された。そこでは、深夜2時以降の酒類の販売が禁止されたり、公共の場での飲酒喫煙が禁止されたが、野沢温泉は深夜に出歩く人がそもそも少なく、お酒を飲む人も歩いて行ける範囲内にあるバーや居酒屋で飲むため、トラブルになりやすいお酒に関するトラブルをあまり身近に感じないのかもしれない。

## 2 村民独自のホスピタリティ精神

野沢温泉村で宿を営んでいる方へのインタビューで、どんなお客様にも初めに温泉の入り方などの温泉文化の話をするという話を聞かせてもらった。「外湯は一番の宝物でもあり、一番やな思いをさせる、悪いイメージを与えるものでもある。注意するのは、本当は愛。心無い一言、汚い言葉のこともあるが、それで怒られて嫌な気持ちになって帰ってくるのは避けたい。最初の説明だけで大きく変わってくる」という。外国人観光客に限ったことではないが、確かに、野沢温泉では、濡れたままのこの上にあがったり、熱いからと言って水を温泉に足しすぎると地元の方々から注意を受けることがある。何か問題が起きたときに放置せず、外国人観光客であろうが日本語以外話せなかりがコミュニケーションをとって、その場でマナーを正そうとしてきたからこそ、現在マナーに関して大きなトラブルは起こっていないのかもしれない。

とはいえ、注意を受けて、不快な思いをして帰ってくる観光客も少なくない。そもそも何も知らずに外湯に赴いて注意を受けることのないよう、どのお客様にも温泉の話をするといった彼らなりのホスピタリティ精神も、外国人観光客に対してネガティブなイメージを持ちにくいことにつながっているのであろう。

## 3 野沢温泉の観光形態

野沢温泉スキー場で外国人観光客とのトラブルが起きにくい原因の一つに野沢温泉独特の観光形態も挙げておきたい。

インタビュー調査をする中でも、野沢を選ぶ外国人観光客は、「求めてきているもの」がちがうのではないかと、というものがあつた。野沢温泉スキー場は決してアクセスのいいスキー場とは言えない。さらに、宿泊の多くが民宿であり、ハイレベルで外国語に対応できる施設は少ない。スキーを楽しむことだけを求めている人や、利便性を第一に考えるのであれば、野沢ではなくニセコや白馬など他のスキー場を選ぶことも可能である。パウダースノーを求めてくる人が多いのはもちろんであるが、その上で野沢の情緒ある街並みであったり、現地の人と外湯でみられるような交流を楽しむことなどにも重きを置く人が選ぶ野沢温泉だからこそ、現地の文化をリスペクトしようとする外国人観光客が多く集まるのではないかと。

また、観光形態の分類の一つとして「個人」「団体」のうち、野沢温泉ではほとんど団体を受け入れていない。（合宿等で学生を受け入れることはあるが、外国人観光客向けの団体ツアーを受け入れている宿は稀である。）これは団体客を受け入れられるほどの大きな施設が少ないことに起因するが、結果として「比較的マナーに関するトラブルが起りにくい仕組みになっているのかもしれない」との意見もあつた。

### 6-3. 「中国人」にネガティブな印象を持つ理由

インタビュー調査では、外国人観光客のマナーに関するネガティブな意見は少なかった。しかし、数は少ないながらも、中国人、とりわけ中国本土からの外国人観光客だけに

はネガティブなイメージを持っていたり、ネガティブなエピソードを持っていることがあった。この節では、野沢温泉村においても、どうして外国人観光客の中で「中国人」だけがそのように捉えられてしまうのかについて、インタビュー調査をもとに考察する。これらを明らかにすることによって、野沢温泉におけるマナー問題の背景となるものを探ることを目的とする。

### ①掛け橋的存在の不在

現在、野沢温泉村では外国人経営者が急増しているが、その多くがオーストラリア人経営者である。野沢温泉村では、外国人経営者が外国人観光客と日本人住民をつなぐブリッジ人材のような役割を果たしており、ローカルルールをよく理解している外国人オーナーが外国人観光客に野沢の文化を伝えてくれている側面があるとの見方がある。しかし、中国語を話せるオーナーはまだ少ないため、英語を話せる西欧系の外国人観光客と比べて、中国語しか話せない中国人にとってはローカルルールを知る機会がまだ少ないのではないかと意見があった。

### ②言葉の壁

インタビュー調査を行う中でもとりわけ多く挙げられた意見に、「中国人観光客（特に中国本土からの観光客）の中には英語が通じない人が多いから、お互いに話ができないこともある」といったものがあった。英語が通じるのであれば、トラブルになりやすい温泉の入り方などを片言の英語でも伝えられるが、英語が通じないとお互いに歩み寄ることが難しい。言葉の壁が存在することで、「対話」することが難しくなっている。中国と日本で文化や風習の違いがあることは自明であるが、「観光」するうえで、お互いのバックグラウンドの違いを理解するための交流がなされないまま、自国の文化を持ち込んでしまうことがマナー問題の原因となることもあるのではないかと。ちなみに、中国人との言葉の壁の問題に関しては、「漢字を使った筆談でコミュニケーションをとることができる」という意見もあった。

### ③メディアによるイメージの再生産の可能性

今回は詳細な関連性については触れられなかったが、メディアでの中国人のマナーに対する批判的な報道が「マナーの悪い中国人」というイメージを植え付け、野沢温泉の人々の経験と結びつくことでラベリングされている可能性にも注意したい。

インタビュー調査で、「中国人はマナーが悪いこともある」という意見が出た背景を探るべく以上のように分析したが、「中国人」も一人の人間であり、インタビュー調査を行った人々の中にも、「国というより、人それぞれ」と述べていた人も多くいた。「中国人観光客より、日本人のほうがよっぽどマナーが悪い時だってある」という意見もあった。国籍に結びつけて考えるのではなく、悪いマナーが出てくる原因を考えることができ

ば、マナー問題の予防につながるだろう。

## 7. 白馬村における外国人観光客のイメージ

この章は、インタビュー調査の結果として白馬村住民が外国人に持っている印象を記し、調査結果をもとにそのような印象を持つ要因を分析したものである。

### 7-1. 白馬村における外国人観光客のイメージの概要

野沢温泉村同様、ポジティブな傾向が認められる。しかし、野沢温泉村と白馬村で大きく異なった点は、「外国人だから」と特別視するよりも「日本人、外国人に関わらず問題は起こる」といった言葉が目立ったということであった。人口のおよそ10%が外国人である白馬村においては、かつては「外国人」としてみていた人々も「今や、村民」として村内になじんでいる。その結果として、「外国人」というカテゴライズ化された見えない壁を越えて、外国人を一人の「人」として捉える人々が増えてきているのではないだろうか。

### 7-2. ポジティブな印象を持つ理由

#### ① 肌で感じられる経済効果

1998年の長野オリンピック後、スキー産業は低迷期に突入することとなった。その影響は白馬村でも顕著なものであり、多くの村民が持ち宿を手放す決断をしたが、外国人がそれを購入し、建て直した。インタビュー調査を通して、白馬村では昔から「外国人のおかげで助かっている」という意識が強く根付いているように感じられた。

「彼らは活性化してくれる」「国内の投資も増えて好循環」。インタビュー調査では、外国人観光客が多く来てくれることから、外国人が白馬村のビジネスにも参入してくれるようになったこと、そのおかげで白馬村の予算では成しえなかった様々な投資が行われ、徐々に村自体が整備され、綺麗になっていっているなどの声があった。実際、この数年間で新しくリフトが増えたり、レストハウスを建て替えることができ、結果としてさらに海外の人が来てくれることに対する期待感の高まりから、さらなる投資が行われているという好循環が生まれているようだ。外国人が始めた投資の結果、最近では長野県が、白馬の山が見える通り沿いの電柱を全て埋設する計画を進めてくれているまでになっている。また、現在冬のスキーシーズンに訪れるお客様の大部分も外国からの観光客が占めており、来てくれる彼らのおかげでビジネスが成り立っているとの声もあった。

このよう外国人投資家による目に見える変化や、外国人観光客の経済効果を肌で感じてきた白馬村の住民は「外国人観光客（投資家含め）のおかげで」という思いを比較的強く持っているのかもしれない。

## ②美しい村と快的な生活環境を守る条例

白馬村では、外国人観光客の増加によって、トラブルや迷惑行為が増加した結果、平成27年12月に住民の声を参考に「美しい村と快的な生活環境を守る条例」が施行されている。この条例では、チラシを通じて禁止事項の告知がされたが、強制力や罰則等はないためにその効果を疑問視する声はインタビュー内でも上がっていた。しかし、外国人観光客とのトラブルを考えたとき、「トラブルを起こした外国人」に対してのアプローチだけでなく、「白馬村の地域住民」にも協力できる点を盛り込んであるところにこの条例の意義を感じられる。例えば、「美しい村と快的な生活環境を守る条例」第2章・第13条で「酒類の提供を伴う飲食店は、午前2時を過ぎて営業を行ってはならない。」、第14条で「何人も、自動車等を放置し、若しくは放置させてはならない。また、これを放置し、若しくは放置させようとする者に協力してはならない。」とあるように、禁止事項だけでなく、白馬の地域住民と合わせて、より良い白馬を作っていこうという白馬村住民の考えが、結果として、白馬村において外国人移住者との共生を可能にしているように考えられる。

## ③HIBA, Facebook を通した外国人コミュニティの存在

インタビュー調査を通して、白馬村では、白馬村を訪れる外国人観光客や外国人移住者が繋がる場がいくつか存在することが分かった。インタビュー調査では、外国人経営者が集まる組織「HIBA」の存在やFacebook上のバーチャルコミュニティの存在が明らかとなった。「HIBA」は、Hakuba International Business Associationの略である。地域活性化や外国人と地元住民との交流促進を目的に結成された組織であり、白馬村に移住した外国人や白馬村で経営を行っている外国人約40人がメンバーとなって活動を行っている。具体的な活動例としては、長野地震の際にリフト券を通して募金を行ったり、白馬村村役場と提携して白馬村のマナーを訪れる外国人観光客に「周知」する活動を行っているようである。

Facebookに関しては、Hakuba Crewというグループ内で白馬村に関する様々な情報が共有されていることが分かった。Hakuba Crewには5000人近くのメンバーがおり、その内訳はほとんどが白馬に身を置く、もしくは白馬を訪れる予定のある外国人である。コミュニティ内では、外国人同士でイベントやお店の告知や、仕事（ボランティア）の募集、投稿された疑問（降雪状況やバスの時刻表など）への受け答えなどが日常的に行われている。

野沢温泉村でも外国人同士のつながりや、外国人移住者→外国人観光客へのアプローチは見られたが、このような大きな規模間での外国人同士のコミュニティが確認できたのは白馬だけである。こういった外国人同士の空間が存在することによって、ローカルルール含む様々な情報を得る機会が増加していることや、行政と連携して訪れる外国人観光客・移住者に情報を周知していることが、結果として白馬村における外国人との共生を支えているのかもしれない。

#### ④村内・イベントでの交流

白馬村では、「百馬力」という白馬の課題を解決するために、企画を掲げ、予算をコミュニティ内で募り、実行するグループがある。このようなグループを通して発案された企画に参加していたり、地域のお祭りでおみこしを担いでいたり、運動会に外国人が喜んで参加している姿は「本当によく見る光景」なのだそう。また、白馬村にはすでに多くの外国人が移住しており、白馬の小中学校にも多くのハーフの子、外国人の子が在籍している。このように外国人が身近で、生活になじんでいる環境であるからこそ、「外国人」というカテゴライズされたバイアスを通すことなく、フラットに一個人としての外国人と向き合いやすい環境があるのではないだろうか。

#### 7-3.ネガティブな印象を持つ理由

##### 1 ワーキングホリデー

インタビュー調査を通して、ネガティブな印象を持つ理由の一つとして挙げられたのが「ワーキングホリデー」の存在である。白馬村では、外国人同士の口コミやインターネット上の募集を通して、多くの外国人がワーキングホリデーのために訪れている。海外から訪れる外国人観光客は限られた期間の滞在であり、翌日は早朝から（朝食もとらずに）スキーに出掛ける人が多いという。そのために夜は比較的早く就寝する傾向があるという。一方で、ワーキングホリデーの外国人は比較的長期間の滞在である。ワーキングホリデーのために白馬村を訪れた外国人が出会った仲間と遅くまで飲み、騒いでいる様子は村役場にも頻繁に報告されている。

##### 2 顔の見えない買い付け

ネガティブな印象を持つ理由のもう一つの原因として、「顔の見えない買い付け」が行われていることが挙げられる。野沢温泉村と白馬村の決定的な違いの一つとして、開発の規模感の違いがある。スキー場や周辺の土地は村か村民が基本的に所有しており、個人の外国人が空いた土地を買い取る形が主流な野沢温泉村に対し、白馬村ではスキー場のリフト等も外国資本が所有しており、土地も個人単位ではなく巨大な資本が買い付けを行うこともある。結果として、白馬村ではだれが買ったかわからないまま、村の土地がいつの間にか買われている「顔の見えない買い付け」が多々行われている。インタビュー調査でも、「その土地が大きい外国の資本に買われていったことは聞いたが、買った人に会うこともないから、この後どうなるのかとか全くわからない。しかも村全体でどれだけ外国人の買い付けが進んでいるかを把握する方法もないから、気づいたら手遅れになっていそうで怖い。」との声があった。直接的なネガティブイメージの原因ではないが、「顔が見えない」からこそ蔓延する漠然とした将来に対する不安こそが、白馬村における外国人に対するネガティブな印象を持つ理由なのかもしれない。

## 8. 野沢温泉村における増え続ける外国人経営者との関係

### 8-1.外国人経営者のかたち

ニセコや白馬など多くのスキーリゾート地がそう変わってきたように、野沢温泉村においても年々野沢に土地を持つ外国人経営者が増えてきている。現在、野沢温泉村における外国人経営者の数は50～60軒あるとされている。その形は様々であるが、移住者や経営者としてシーズン中は野沢で過ごし、残りは母国に帰るケースが多数を占める。バカンスの間や、野沢温泉でお祭りが行われる期間だけ過ごすための別荘のように利用している経営者もいれば、バーやパン屋さん、もしくは宿泊施設として観光業に携わっている場合もある。これまでの外国人経営者はオーストラリア人やヨーロッパ系の人が多かったが、最近の兆候としては中国系の経営者も増加傾向にある。ここでは、外国人観光客ではないという異なった視点からも外国人との共存を考えてみたい。

### 8-2.外国人経営者が増えることへの懸念

外国人観光客に対しては比較的寛大で肯定的な野沢温泉村の村民であるが、外国人経営者が増えてきている流れに関しては、否定的な意見も目立った。この節ではインタビュー調査を通して明らかとなった村民の抱える懸念をいくつか紹介したい。

インタビュー調査の結果として挙げられた懸念は大きく3つに分けられる。

一つ目は、外国人経営者の地域社会のルールや習慣に関する懸念である。野沢に住む以上、村の伝統を守るために払わなければいけないお金を払うことや、野沢温泉観光協会の協会員となって村の行政を担う一端となるのが外国人経営者にも求められている。協会員となることで、食中毒が出る可能性の高い環境に対する警告や、インフルエンザの流行状況を伝えることも容易になる。毎月10日に配布される協会報を通して、村で行われるイベント等の情報も得ることができる。こういった村の動きを把握することで、村全体としてのまとまりが出てくるにもかかわらず、村に滞在する日数が短い外国人経営者はこういった活動に参加しないことも多い。実際野沢の外国人経営者50～60軒のうち、協会に所属しているのは10数軒である。

また、インタビューの中で、ごみの出し方をわかっていない外国人経営者がいることを指摘する声があった。「野沢温泉指定のごみ袋に入れてないし、分別されてない。だから英語表記の黄色いシール貼られちゃう。結局ほかの人が分別しなおしてごみに出すこともあるんだよね」。一方で、「村に不動産を持つ外国人経営者は、ごみの問題のようなマナーにかかわる問題を彼らは知らないだけであって、一度教えてあげると、なんだそういうことだったの、と改善してくれる」という意見もあった。

二つ目は、空き家に関するものである。外国人経営者の多くは1年中野沢で過ごしているわけではないため、だれも住んでいない期間があったり、貸別荘・民泊に関する問題なども挙がってきている。管理人がいない状況で冬を迎えてしまうと、積もった雪によって

事故が発生することも考えられる。こういった状況に対応すべく、野沢温泉村では民泊に関する野沢温泉村独自のルールとして、管理人が近くにいない状況下での民泊は禁止されるようになった。

三つ目は、野沢温泉村の将来についての懸念である。インタビュー調査の中で、以前はニセコで外国人を相手に商売をしていた人が、ニセコに見切りをつけて野沢温泉村に移住してきたという話を聞いた。4年ほど前に、その人は野沢温泉村の講演会で「野沢はこのままをアピールすればいい。このままを大切に、変に変わらないでほしい。」という内容を話したそうだ。「野沢の人はいくらお金を積まれても外国人に土地を売らないでね」とも話したそうだ。野沢温泉に外国人経営者が増えすぎて、ニセコや白馬のように変わってしまうこと、もしくは「野沢らしさ」が失われてしまうことを懸念する声はとりわけ多いように思われる。実際、私が野沢で冬を過ごしてきたこの5年間の間にも、毎年目に見えて外国人が経営するバーやカフェが増加している。そういった場所には外国人も集まりやすい傾向があり、その様子を見ていると外国にいるような錯覚に陥ることさえある。村民の方もそういった変化を感じており、「野沢の大切な資源である水資源。あれは水路を先人たちが手作業で開発したものだけど、海外の人が不動産を持つことでそういう資源の権利を主張するようなことがあったらいやだ」といった意見や「増えている外国人に対応するために食堂の数は増やさないといけないけど、あまりにも外国人のための施設が増えすぎるとなんかしらけちゃう」といった意見もあった。外国人は夕食を宿ではなく、外に出て食べることが多い。野沢で民宿を経営している人は口をそろえて、外国人の対応で最も多いことの一つに夕食に関するものがあげられるという。ゆえに、外国人が増えると夕食が食べられる施設がさらに必要となるが、そういった流れの中で外国人のための町へと野沢が変わりすぎてしまわないかを懸念しているのだ。ニセコを例にとるとわかりやすいが、外国人経営者が不動産を買った際にも、外国人仕様に改築することで街並みも変化する。加えて、野沢に住むような外国人経営者は、「なにか」が起こったときにすぐ母国に帰ってしまう。東日本大震災発生時に訪日外国人の数が減少したように、ある意味「不安定」といえる外国人によって野沢が構成されていくことに対する不安を口にしている村民もいた。

こういった状況に関わる特殊な例として、今回インタビューさせていただいたオーストラリア人経営者の例を紹介したい。彼は、スキー場のパトロールのアルバイトのために27年前に野沢を始めて訪れた。「野沢には自分の求めているものがすべてあった」と話す彼は、その後野沢で不動産を買い始め、毎年数軒の不動産を購入している。その理由は「あまり野沢の物件を外国の人に買ってほしくない。野沢の伝統的な感じを大事にしたい」ということだ。彼は購入した不動産を野沢の景観を損ねないように建て替え、宿泊施設を運営している。そこで彼は外国人観光客向けにオリエンテーションを行ったり、野沢のローカルルールや魅力を伝えている。自分自身も外国人であるが、村のことを知らない外国人に買われて野沢温泉村がその「良さ」を失うリスクにさらされる前に、自分自身がそれらの物件を購入することで村の野沢らしさを守ろうとしているのだ。

### 8-3.外国人経営者が野沢で果たしている役割

前の節では、インタビュー調査を通じて知った増え続ける外国人経営者に対する不安を取り上げたが、この節では、彼らが野沢にもたらしているポジティブな側面についての意見をまとめる。

「野沢に住んでいる外国人経営者は、村のことをよく理解してくれている人も多い。その人たちは、冬のシーズン中こっちにいて、野沢の文化になじんでいたりする。お風呂（外湯）でも、ここはこうなんだよと、ここはこういう場所だからこういう風にしてくださいねと間違った入り方をしている外国人に自然と伝えてくれてたりするんだ。ありがたいね。」このように、野沢の文化を理解した外国人経営者たちが外湯などで外国人観光客に野沢のルールを伝えてくれている様子は見られるそうだ。「オーストラリアとかからの人たち（外国人経営者）には、野沢組からお風呂のこととか歴史について話してあるので、自分の宿に泊まる外国人観光客に伝わっている。中国人の経営者とかはまだ少ないから、中国人観光客にはまだ伝わっていないことも多いのかな」このようにその国の経営者が自分の宿に泊まる観光客に地域社会のマナーについて話してくれていることで、外湯や温泉街などの公共の場でのトラブルが自然と防がれているという一面は存在するのかもしれない。今回インタビュー調査を行った外国人経営者の方に、「外国人観光客に向けて何か働きかけていたりしますか？」と質問をしたところ、彼は新しいお客さんが到着すると必ずオリエンテーション行うという話をしてくれた。「椅子に座ってコーヒー飲みながら地図を見て、温泉の入り方とかも説明する。ビデオも作っていて、それも見る。2つあって、You Tube で公開している。1つはオリエンテーション編。もう一つは温泉の入り方。」彼のように外国人経営者として積極的に、体系的に外国人観光客に野沢になじんでもらうための努力をしてくれている外国人経営者も存在する。

### 8-4.共生に向けた取り組み

これまで見てきたように外国人経営者に関しては、増え続けることに対する懸念や文化の違いによるすれ違いに対する懸念がある一方、彼ら自身が外国人観光客と村民の間に立って外国人観光客が地域社会におけるマナーを守る環境を作ってくれている可能性があることに言及してきた。この節では、外国人経営者に対して、実際どのような働きかけがなされているのかを説明する。

まず、毎年冬に1回、行政の呼びかけで、外国人経営者とスキー場、野沢温泉観光協会、警察、消防署との懇親会が開催されている。お互いが、お互いに困っていることや要望を交換する場を設けることによって、より良い共生を目指した取り組みとなっている。こういった場で、問題点にも挙がっていた外国人経営者のごみの出し方を指導したり、野沢温泉観光協会に入ってほしいという要望を伝えたりしているのである。

また、地域によっては外国人観光客向けのチェックインの窓口を一か所に集約し、外国人観光客とのやり取りをスムーズに行っている。つまり、外国人観光客は各々の宿泊する

宿に直接アポイントメントをとってチェックインするのではなく、ある場所を通して予約を取り、村に着いたらまずそこでチェックインを行って、各旅館・民宿に移動するシステムがある。そうすることによって、手続き上のトラブルを予防でき、野沢に住む外国人を通して、最低限のローカルルール等にも触れることができる。

## 9. 白馬村における増え続ける外国人経営者との関係

### 9-1. 外国人経営者のかたち

すでに4章で述べたように、白馬村における外国人移住者・経営者の数は急激に増加しており、村内の外国人の割合は白馬村人口の1割を超える。白馬村に滞在している外国人の形は様々であり、インタビュー調査では、移住者・経営者・投資家・ワーキングホリデー・観光客に分類することができた。野沢温泉村と異なるのは、白馬村には巨大な外国資本が多数進出してきており、白馬村に身を置かずに投資のみ行う投資家や、白馬村に身を置かずに経営だけを行う経営者が多数存在することである。この章では、上記の中でも移住者・経営者・投資家を取り上げ、白馬村における外国人との共生について考えてみたい。

### 9-2. 外国人経営者が増えることへの懸念

白馬村に移住する外国人に対して「Welcome」な姿勢を貫き、移住してくる外国人に対して様々なサポートを実施している白馬村であるが、インタビュー調査を通していくつかの懸念事項も聞くことができた。この説ではその内容を以下に紹介する。

インタビュー調査の結果として挙げられた懸念は大きく3つに分けられる。

一つ目は、将来の白馬村の姿に関する不安である。7章でも取り上げた「顔の見えない買い付け」にも関係する。白馬村では巨大な外国資本が多く参入しており、誰が購入したかもわからないまま村内の土地が売買されていくことによる、漠然とした将来の村の姿に対する不安があるようだ。個人が買うことが多いことから、どんな誰がその土地を買ったかがわかりやすい野沢温泉と比べて、白馬村ではその土地をどんな誰が買ったのかがわかりにくく、トラブルが起きても連絡が取りにくい。土地を「転売目的」で購入し、さらに高値で売りさばかれていても気づくことが難しい。また、白馬村の土地がどれだけ外国人の手に渡っているかを村民は把握しておらず、どれだけ国際化が進んでいるのかを村民自体がわかっていない現状もある。「気づいたらニセコのようななっちゃっているんじゃないか」「将来的にもととの白馬村の住民が住みづらくなるようなことにはなってほしくない」といった意見が挙げられた。開発規模が大きすぎるあまり、村民が村の現状を把握しきれない現状を可視化することができたら、この問題は改善されるかもしれない。

二つ目は、外国人が増加した結果、以前からの制度が実態に即してないことに関する懸念である。例えば、白馬村は以前から長野県の景観の指定地域になっている。これまで

は、条例により景観を邪魔する色として黒い建物を建ててこなかったが、外国人移住者が増加するに伴い、黒い建築資材を扱った黒い建物が増加している現状がある。ほかにも、「美しい村と快適な生活環境を守る条例」がありながら、違反に対する措置もないことから現実的な拘束力が弱いことなど、制度はあるのに、実際にはそれが守られていない、もしくは実態に即していない状態が続いていることに関する懸念があるようだ。急増する外国人移住者を迎え、大きな変化の中にいる今だからこそ、これまでの制度や条例の見直しが必要なかもしれない。

三つめは、経営者視点での外国人コミュニティとの関わりの少なさである。白馬村でのインタビューを通して、白馬村では外国人移住者が村内でなじんでおり、個人的な交流は活発に行われていることが分かった。しかし、経営者的な視点でいうとまだまだ外国人コミュニティとのかかわりは少ないようである。実際に HIBA や Facebook 上の Hakuba Crew のような外国人コミュニティは存在するが、コミュニティ内での情報共有が盛んである一方、日本人村民との関わりはもう少し向上できるのではないかという意見が挙がった。ビジネスにおいても、外国人は外国人同士の人脈を利用してビジネスを回すことが多く、現状そこに加わる日本人は少ない。外国人同士のつながりが強いことは白馬村の長所でもあるが、外国人同士のつながりをさらに日本人住民や日本人経営者ともつなげることができれば、村全体としての一体感は高まるだろう。

### 9-3.外国人経営者が白馬村で果たしている役割

前の節では、インタビュー調査を通じて知った増え続ける外国人経営者に対する不安を取り上げたが、この節では、彼らが白馬にもたらしているポジティブな側面についての意見をまとめる。

インタビュー調査を通して出てきた意見は大きく2つに分類することができる。

一つ目は、経済効果に関わることである。7章でも述べたが、白馬村では1998年の長野オリンピック以降から外国人が村のビジネスに参入し、投資を行い、外国人観光客を連れてきてくれることによる経済効果を肌で感じ続けてきた。外国人が白馬村に投資することで村の予算だけでは行うことのできなかつた工事を行うことができたり、村自体に活気をもたらすことができた。

二つ目は、白馬村の外国人コミュニティに関することである。外国人経営者や移住者が白馬村で HIBA や Hakuba Crew 等のコミュニティを作ったりしてきたことにより、白馬村を訪れる外国人が過ごしやすい環境を築くことができた。また HIBA などが、村役場と協同して情報を外国人に流す「懸け橋的役割」を担ってくれたことにより、マナー摩擦を予防できた側面も否めないであろう。

### 9-4.共生に向けた取り組み

これまで見てきたように外国人経営者に関しては、増え続けることに対する懸念がある一方、彼らが多大なる経済効果をもたらしてきた側面や、外国人コミュニティの存在が白

馬村における外国人の過ごす環境を向上させてきたり、野沢温泉村と同様に「懸け橋的役割」を果たすことによってマナー摩擦が防がれてきた可能性があることに言及してきた。

この節では、白馬村で外国人経営者に対して、実際どのような働きかけがなされているのかインタビュー調査を通して知ったことを説明する。

まず、「美しい村と快適な生活環境を守る条例」を施行するなど、村民や訪れる外国人のトラブルを避ける為に、村の行政が動いていることが分かる。罰則規定のない条例であるが、このような形で村の在り方を共有している点は野沢温泉とは異なる。他にも白馬村の村役場では、移住してきた外国人に対し必要な手続きの説明やサポートを行ったり、白馬村の学校に通う外国人の子供だけでなく、親の（言語的・文化的）サポート等も行っている。

もう一点注目すべきは、HIBA の存在である。白馬村の特徴として、外国人同士のつながりが強いことが挙げられるが、そういった HIBA のような外国人集団と村役場がコミュニケーションをとっていることで、お互いにとって共生しやすい環境が生まれている可能性がある。

## 10. 野沢温泉村と白馬村の違いを生んだ背景

同じ長野県北部に位置する村でありながら、増え続ける外国人観光客・移住者・投資家に対して、大きく異なる対応をしている野沢温泉村と白馬村。この章では、二村を分かつ原因となったものを、インタビュー調査をもとにまとめることとする。

### ①村の成り立ちと経営主体

野沢温泉村と白馬村は、そもそも村の成り立ちと開発方法が大きく異なっていることに一つ目の違いがある。

野沢温泉村は、昔から野沢温泉村という村自体でスキー場を管理、経営してきた。また昔から野沢温泉村の住民が村内の多くの土地を所有しており、住民に対しての交渉となるため新規参入が比較的難しいという背景がある。一方、白馬村に関しては、村ではなく、企業が主体でスキー場を経営している。複数のリフト会社があつての開発の仕方だったがゆえに、投資額も大きく、開発の規模やスピードにも違いがあつた。また、白馬村は、坂道の多い野沢温泉村と比べても土地が開けており、比較的平らである。ゆえに、早い段階で開拓済みのエリア（別荘地街、保養地、セミナーハウス）が存在しており、野沢温泉村に比べて参入しやすかったといえる。

### ②長野オリンピック

二つ目の違いに長野オリンピックの存在が挙げられる。野沢温泉村も白馬村も会場となったが、バイアスロンのみの競技会場であつた野沢温泉村に対して、白馬村はアルペンス

キー、ジャンプ、クロスカントリースキー、ノルディック複合の4種目の競技会場であった。両村・両住民とも来る長野オリンピックに向けて投資を行った。しかし、白馬におけるインタビュー調査でも、知り合いの多くの宿が数億単位の投資を行っていたという話があったように、より多くの競技会場となった白馬村の方がその規模は大きかった。

長野オリンピック以降、スキー界ではスキー産業低迷期を迎えることとなる。投資規模の大きさの反動で多くの宿が経営難に陥り、白馬村でもオリンピック投資の反動で多くの人が宿を手放した。このようにして手放された宿を外国人投資家が買い取りたてなおしたことに白馬村における外国人投資家・移住者の原点があるともされる。

また、野沢温泉村に比べて、長野オリンピックに向けて投資額の大きかった白馬村においては、個人の経営する宿においても、外国人をターゲットとした改装を行った宿が多くあった。私がインタビュー調査を実施した宿も、オリンピックのタイミングで部屋の大部分を外国人仕様に変えたそうである。このように、長野オリンピックに向けた投資の結果、外国人の手に渡る宿が増えたことや外国人に対応するようにリフォームされた宿が野沢温泉村に比べて白馬において、より多く存在したことが後々の外国人に対するアプローチの違いに繋がったと考えられる。

### ③求められているもの

野沢温泉村と白馬村では、訪れる外国人が求めてきているものの優先順位が異なる傾向にある可能性がある。近年ではヘリポートも設置され、比較的アクセスが良い白馬村に対し、野沢温泉村は比較的アクセスが悪い。また、村役場や観光案内所でのインタビュー調査より、訪れる外国人観光客に合わせて比較的变化を推し進めてきた白馬村に対し、野沢温泉村は大きな変化を推し進めるよりも昔ながらの野沢温泉を守るように行動してきたように感じられる。このような違いから、英語が通じ、比較的アクセスが良く、利便性の高いスキー場を求めるか、地域の人々との交流や街並みを求めるかで、そもそも訪れる外国人の趣向が異なる傾向があるのかもしれない。

## 11. 今後の展望～増え続ける外国人観といかに共生していくか

野沢温泉村と白馬村でインタビュー調査を行っているとき、比較的上手に外国人観光客と共生している印象を受ける。しかし、状況は刻一刻と変化しており、外国人経営者の急激な増加と増え続ける外国人観光客、変わりゆく街並みを前に、「このまま流れに任せていていいのか」という思いを抱えている村民も多くいる。この章では、増え続ける外国人と今後も上手く共生していくために、どのようなことができるかを検討したい。その際に、インタビュー調査で得た野沢温泉村・白馬村の長所をお互いに取り入れることも含め、考えていきたい。

現在の日本のスキー場において、外国人は切っても切れない関係にある。スキー産業

の低迷期以来、スキー場を支えてきたのは外国人観光客でもあり、両村に住む外国人経営者によって外国人観光客とのスムーズなやり取りができていたという側面もある。しかし、このままのペースで外国人観光客や外国人経営者が増え続ければ、その地域の村民が考える「野沢温泉らしさ」「白馬らしさ」が失われていくかもしれない。土地ならではの魅力が失われ、ニセコのように外国のような街並みになっていくかもしれない。

#### 11-1. 野沢温泉村への提言

野沢温泉でのインタビュー調査では、「変わるべきところは変わりつつ、野沢らしさは遺しつつ、守りつついきたい」という声があった。実際にインタビュー調査でも、野沢温泉の村民は「野沢らしさ」という単語を口にすることが多かった。その「野沢らしさ」とは「温泉（外湯）と温泉文化」「街並み」「村民の生活圏に観光客を受け入れている」とことと関連付けている人が多く、野沢温泉村の村民はそういったところにアイデンティティを持っている人が多いのだろうと考える。インタビュー調査においては、多くの村民は「変化」することを否定的に考えているわけではない。しかし、どこまで「変化」を受け入れるのか、どこで歯止めをかけるのか、建物を建てる時どのような景観を守るのか。外国人とのより良い関係を保ち、野沢温泉の良さを次世代に伝えていくためには、どのような村づくりをしたいかという、より明確な受け入れビジョンを持つことも大事なのではないだろうか。インタビュー調査において、対象者が、自分の考えを口に出していく中で自分の求めているものに気付くことができたり、対象者の村民同士で対話していく中で「野沢の良さを守るにはこうしていくべきだよ」という話で盛り上がっている様子も見られた。ありそうでなかった試みとして、村民同士が日常的に野沢温泉村について「話す」機会を創ることが、より明確な受け入れビジョンの構築につながるのではないかと考える。野沢温泉村は、自分たちの村を自分たちの手で作ってきた。しかし、多くの外国人観光客や外国人経営者を受け入れている変化の中、今、未来の野沢像を描くことができなければ、気付いた時には、「野沢の良さ」と思われてきたものが失われているかもしれない。小さな村だからこそ、多くの住民のリアルな声や議論を取り上げることができる。野沢を愛し、理解する外国人も輪に加わって、野沢温泉の今後を話し合える身近な「場所」を創っていくことで、多くの議論が生まれ、人々に共有され、野沢温泉の目指す姿を明確にしていくことができるのではないだろうか。

そういった場所として白馬村での「百馬力」という組織から学びたい。「百馬力」とは、「百年後の白馬を考えたときに、こんなことを村でやってみたい」と考えたことを提案、そして実現するためのサポートをもらう場として機能している。白馬村では実際若者が挙げた声を事業家たちが様々な角度からサポートすることが多いが、野沢温泉村においても「百年後の野沢温泉村を考えたときに何かしたい！」と考えた人を共感した人がサポートする形で応用できるのではないだろうか。外国人住民も多い野沢温泉村では、村民とは異なったコミュニティやバックグラウンドを持った外国人も参加・サポートすることができる可能性もある。「百馬力」のような組織が、野沢温泉村の村民が「未来を語る場所」と

して機能することができれば、野沢温泉村の未来を自分事として考えられる村民が増え、野沢温泉村にとってより良い共生の形を探ることへと繋がっていこう。

## 11-2. 白馬村への提言

白馬村は HIBA 等の外国人同士のコミュニティも充実しており、百馬力などを通しての若者の活動も盛んである。問題が起こることはあるものの、行政のサポートも比較的充実しており、急激に増える外国人も柔軟に受け入れてる白馬村であるが、私がインタビュー調査を通して感じた懸念が二つある。

一つは、あまりにも「Welcome」ベースで外国資本や投資家をも受け入れ続けてきた結果、今やどれほどの土地や不動産が「顔も分からない人」に渡っているのかを村民が把握できていないことである。そういった現状が一部で漠然とした不安をもたらしている原因にもなっている。外国企業が多額の投資をしていることも、外国人移住者が移住して新たなビジネスを行ったりしていることから白馬村は多額のメリットを享受しているが、そういった動きを推し進めてきた一方で、変わっていく村の様子を村人が把握しやすいように改善できれば良いと思う。外国人や外国資本の介入のしやすさは白馬村の長所でもあるので「顔の見えない買い付け」に規制をかけるよりも、イベントなどを通じた普段白馬村にいない外国人経営者・投資家との草の根レベルの交流を提案したい。野沢温泉村では、野沢に土地を買ったが普段は外国に住んでいる外国人がこぞって村に集まる時期がある。「道祖神祭り」の時期である。一年の同じ時期に村に帰ってくることを近所の方も分かっているのだから、その時期に交流を行うことができる。野沢温泉村のこういった風習から学び、白馬村も普段は白馬村にいない人々と交流する機会を設けることができれば、「顔が見えない」ことへの不安は和らいでいこう。

二つ目が、外国人が急激に増えている中、この流れについていけずに店を畳んだり、流れについていけないからこそ外部からの流入に対して保守的になってしまう層が一定数いることである。インタビュー調査を通して多くはお年寄りに、一定数そのような方がいる話を知った。白馬における保守的な考えを持つ人の多くは、抗議の声を上げることなく、自分たちの世代で店じまいをしたり、周囲との関わりを徐々に断ってってしまうようである。それゆえに、そういった意見を持つ人々の存在は見えにくく、気づきにくい。今回のインタビューでは直接保守層の人々に話を聴くことはできなかったが、彼らにも目を向け、流れについていけなくなった原因や、どのようなサポートが有効であるかを考えることで、真の共生に近づくののではないだろうか。

## 12. おわりに

本論文では、インタビュー調査をもとに野沢温泉村と白馬村における外国人観光客との共生の現状と今後の展望について考察してきた。第2章で問題の概要に触れ、第3章で野

沢温泉村、第4章では白馬村という場所について触れた。第5章では、どのようにインタビュー調査を進めたかを説明した。第6章では、インタビュー調査の結果、野沢温泉村においては外国人観光客のマナーについて悪い印象を抱いている人が少ない3つの理由の考察を行い、数は少ないながらも中国人だけが比較的悪い印象を持たれる場合があるのかについての分析を行った。第7章では、第6章同様に、白馬村での外国人観光客編イメージと、そのイメージが形成された原因について考察した。第8章・9章では、野沢温泉村と白馬村において増え続ける外国人移住者・経営者との関係について考察し、外国人オーナーが果たしているポジティブな役割に着目するとともに、彼らが増えすぎることへの懸念についても紹介した。第10章では、これまでの野沢温泉村・白馬村での調査を通してみえた違いに注目し、その違いが生まれた背景について分析した。最後に11章では、比較研究を通して考えた、増え続ける外国人と今後ともよい関係を築いていくために何をすべきかを考察した。

本論文は、野沢温泉村に住む人々へのインタビューは多く行えたが、白馬村におけるインタビューは野沢の半分程度しか集めることができなかつたため、野沢の方が情報量が多い。また、白馬村における外国人移住者にはインタビューをする機会がもてず、実際に移住した側から見た観点が欠けている可能性があるため、この2点を今後の課題としたい。本論文が、野沢温泉村と白馬村、ひいては外国人が増加する他の地域において、外国人とより良い共生を実現するための一助となれば幸いである。

#### □参考文献

- 安村克己他(2011)『よくわかる観光社会学』、ミネルヴァ書房  
大関雅弘(2017)『現代社会への多様なまなざし 社会学の第一歩』、晃洋書房  
呉羽正昭(2017)『スキーリゾートの発展プロセス 日本とオーストラリアの比較研究』、二宮書房  
柴田耕介(2005)「観光産業の実態と課題」『特集・観光立国と交通政策／論説』、国際交通安全学会誌、第31巻、pp.195-214  
名倉一希他(2017)「野沢温泉村におけるスキー観光の変容—インバウンド・ツーリズムの展開に着目して—」『地域研究年報』、第39巻、pp.65-89  
松本一郎(2016)「訪日外国人観光客の増加とインバウンド・ツーリズムの興隆：小売業への影響に関する一考察」『日本経大論集』、第46巻、1号、pp.237-247

特定非営利活動法人長野情報通信研究所 (2009) 「外国人観光客における日本の「食」と「文化交流」に関するアンケート報告書」